

---

# 異世界の料理人

そら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の料理人

### 【Nコード】

N6498Z

### 【作者名】

そら

### 【あらすじ】

鈴野尊（27歳）、元料理人。命の灯が消えかけた娘の命を救うには、女神ディオネが管理する「ディオネシア」という名の異世界で“俺ができること”をしなければならぬ。娘とともに異世界に召還された尊は、異世界の食文化に愕然としつつも、食材を集めて元料理人としての腕を揮う。- “俺ができること”とは？ - 女神の審判の日までの元料理人の異世界奮闘記！・・・になるといいな。3日程度で1話の更新になるかと思っています。ごゆっくりお待ちいただければ幸いです。

## 1 プロローグ（前書き）

プロローグです。とっても暗いです。

## 1 プロローグ

白のパイプベッド、白の布団、白のカーテン。室内をほぼ白に統一されたこの病室でベッドに娘が横たわっていた。病室のカーテンは閉めているのだが、照明とカーテン越しの秋の日差しで明るい。

俺は、病院に入院している娘に会うため、仕事の合間に抜け出してきたのだ。

「ぱぱ・・・」

時々、うなされたように俺を呼ぶ。

「唯・・・」

俺は、娘をただ見ていることしかできない。

鈴野 唯。

今年、幼稚園の年長になった娘。生まれてすぐに母親を失ったため、母親を知らない。非情な運命のもとに生まれた娘だけど、本当に良い子に育ってくれた。男手一つ育てた・・・と言えればカッコいいのだけれど、残念だが違う。娘を良い子に育てたのは、妻の母親、娘の祖母だ。祖母は学校の先生をしていたこともあるそうで、本当に厳しく、優しく、愛情をもって育ててくれたと思う。

その祖母もいない。昨年、唯の幼稚園入園を見届けると、まもなく亡くなった。もともと、心臓が悪かったらしく、体調を崩してからあっという間だった。

唯もその悲しみからようやく立ち直り、元気な娘の笑顔が見られたと思ったら、1年も経たずに高熱を出して倒れた。

原因不明

医者から聞かされた言葉はそれだった。突然、幼児が高熱を出すということは、知識として知っていたが、原因がわからないとなるとそうとも言っていられない。

自宅療養1カ月、入院が5カ月にも及ぶ闘病生活で、ゆっくりと衰弱していく娘をただ見ていることしかできなかった。

思えば、俺の妻、幸も生まれつき体が弱く、子供の頃から高熱を出しては寝込んでいたという。妻と出会ってから、何度か熱を出して寝込んでいたことがあった。

しかし、これまで風邪をこじらせることもなく元気だった娘が突然高熱を出した時、不覚にも妻の姿をダブらせてしまった。それがいけなかったのか……。

俺は娘のために働くことしかできなかった。親もなく、孤児だった俺に頼れる親戚はいなかった。本当はいるのかもしれないが、産みの親を知らない俺には分からない。妻の幸も父親を早くに亡くし、母子家庭だったという。そちらの親戚もなく、天涯孤独に近い。

働いて入院費を稼ぐ。

高校を中退した俺が町の大衆食堂の厨房で働きはじめ、今はその食堂で料理人として朝から晩まで働いた。医学の知識もなく、他に娘に何もしてやれない今の俺に出来ることを必死にやった。娘が元気になることを信じて、娘の元気な笑顔が見られることを信じて

「ばば……」

唯の目がうつすらと開いた。

「唯、パパはここにいますぞ」

唯の手をとり、声をかける。

「ばば……。ここ……。夜なの？……。まっくら……」

今はまだ昼過ぎ、カーテンは閉めているものの日差しで明るいにも

かわらず。

## 目が

「っ」

唯の言葉に奥歯をグツと噛みしめ、

「唯、そうなんだ。今は真夜中なんだよ。パパのこと、わかるか？」  
声が震えないように、そつと、そつと声をかける。

「・・・うん」

焦点の合っていない目でこちらを向こうとする。声のする方を向いたという感じた。

「ぱぱ・・・あのね・・・、ぱぱと・・・もつと・・・おはなししたかった・・・。ぱぱと・・・あそびたかった・・・。」

## 唯

考えてみれば、唯は産まれてすぐに母親を失い、親は俺だけだった。幸の母親が母親代わりだったが、代わりだ。親じゃない。俺だけだったのに。唯と顔を合わせるの、朝から幼稚園に送るまでと幼稚園のお迎え、夜の少しの時間だけだった。休日もほとんど仕事だった。

俺は、生活のためと仕事に明け暮れ、満足に遊んであげられなかった。構ってあげられなかった。

唯の手を両手で握りしめ、唯に声をかける。

「それじゃ、唯。元気になったら動物園行こうか。唯、行きたがつてたよな。暖かくなつた海でもいいぞ、唯」

そつと声をかけているつもりだったが、後のほうは懇願に近いものだった。

唯はわかっているんだ。俺と過ごせる日が、もう長くないことを

「ぱぱ・・・あのね・・・」

弱い呼吸で唯は言葉を続ける。

「・・・だいすき・・・」

弱弱しい言葉でもはつきりと俺の耳に届く。

「唯っ」

神様

「唯、パパも大好きだぞ」

その言葉に唯がかすかに微笑んだ。

「えへへ・・・」

微笑みが消えると、ゆっくりと唯の目が閉じられる。わずかに保っていた唯の頭や手の力も抜けていく。

神様、この世界にいるのなら、いや、この世界じゃなくても。

神様、助けてくれ。唯を、唯を助けてください。

『助けていますか？その子を』

ベッドの唯にしがみつき、声なき声をあげていた俺に響いてきた言葉だった。

## 1 プロローグ（後書き）

はじめまして、そら と申します。

拙い文章にもかかわらず、ここまでお読みいただきありがとうございます。



## 2 女神の選択（前書き）

2話目です。

表現の仕方が難しかったのですが、深層世界といいますが、精神の世界です。

神様との邂逅シーン。

## 2 女神の選択

顔を上げ、目を開くと世界は真っ白だった。何もない世界。そんなところに俺はいた。先ほどまでしがみついていたはずの唯の姿も見えない。身体感覚もあやふやだ。

ここは・・・？

『この子を助けたいですか？』

頭に響く女性の声、とても澄んだ声で心地よい。だが、その余韻に浸る間もなく、叫ぶように声を上げた。

助けてくれっ！

『この子の命の灯は消えかかっています』

っ

『この子は、もう、この世界で生きていくことはできません。ですが、私の世界ならそれも可能です』

助けてくれっ！娘が助かるなら俺はどうなっても構わないから！

頭で考えた言葉ではなく、心の声を高らかに叫ぶ。唯がまた元氣になってくれるなら、俺自身は本当にどうなってもいい。結果的に唯を悲しませることになるかもしれないが、それでも強く思った。

『貴方も一緒です。この子を助けますが、貴方は私の世界で“貴方ができること”をなさってください』

俺にできること？

『そうです。それが何かは、貴方が私の世界で考えてください』

そんなことで・・・

そんなことでいいの？　ようやく頭が働いてきた。しかし、娘を助ける代償が“俺にできること”をするって・・・。

『これは選択です。このままこの世界で貴方は生きていくこともできます。この子は諦めていただかなくてはなりません』  
ようやく働き始めた頭が、また、この一言で停止した。

唯を助けてくれっ！

思いのままに叫ぶ。今の望みは、唯一の望みはそれだけだから。

『・・・・・・・・わかりました。思いは強いようですね』

その言葉に安堵した。これで唯は助かるんだ。何の保証もないにもかかわらず、そう思った。

幸いというか、唯以外の身内と呼べる存在がいないので、唯が一緒のようだし、この世界に心残りはない。職場の仲間もいることはないのだが、唯の命と引き換えと言われればそうも言ってられない。

そういえば、このところ幸の墓参り行ってないな。まあ、幸も理解してくれるだろう。唯のためなんだから。墓前に報告できなくて悪いが、仕方ないだろう。

それにしても、あなたの世界？

『そうです。こことは別の世界。人が生きる別の世界です』

俺ができること？

高校を中退して大衆食堂で働いただけの俺には、できることなんてほとんどないと言っていい。強いてあげるとすれば、料理ぐらいか。仕事でやってたからな。料理人の端くれとして、人並み以上にできることと言えばそれくらいか。異世界で料理屋でも開くか。異世界にもこの世界のような食材ってあるのかな。まあ、人が生きる世界だから大丈夫か。

『1年後、貴方が何をなさったか確認しましょう』

つらつらと思考に浸っていると、また、頭に声が響いてきた。そうだ、これは代償……。唯の命と引き換えなんだ。適当に考えていいものじゃないんだ。俺ができることを必死に考えないと。

しかし、もし俺が代償を支払えないと唯はどうなるのだろうか？引き換えは唯の命。まさか……

もしも、もしもだ、俺が、その、何もできなかったら？

『……すべては無かったことになります。今この時点に戻り、この世界で貴方は生き続け、この子の命はここで失われます』

っ

やはり、そういうことなのか。身体感覚がないのに、冷や汗が流れたような感じがする。

考えろ、俺にできること。何ができる？これまで唯に何もしてやれなかったんだ。今、唯の父親として俺にできることを考えるんだ。

なあ、幸。俺って何ができるんだろうな。唯の命がかかってるのに、何もできないのか？

なあ、唯。パパは何ができるかな。唯に何もできなかった俺にもできることがあるかな。

『先ほども言いましたが、何ができるかは私の世界を見て、考えてはいかがでしょうか？』

ごもつともです。

示すべき相手に助けられてしまった。ガックリと気を落とす俺に、  
『そろそろ時間になります。よろしいですか』

ああ。唯を、唯を助けてくれ。

『わかりました』

その言葉とともに真つ白なだけだったこの世界に強い光が差し込む。眩い光に無意識に目を閉じてしまう。

そのあと少し間があった。目を瞑ったままでも、強い光を感じる。

再び、女性の声が響く。

『……………選択はなされました。……………ようこそ、我が“デイオネシア”へ……………』

その言葉を最後に俺は意識を失った。

『尊さん、楽しみにしていますね』

尊にそんな言葉が届いていたのだが、意識のない尊は聞くことができなかった。

## 2 女神の選択（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

女神・ディオネ登場です。・・・が、女神様、名のついていません。

### 3 異世界へ（前書き）

ようやく異世界に旅立ちました。

ここから異世界編です。元気になった唯の姿を少しずつ表現していきます。



### 3 異世界へ

朝、目が覚めるのと同じように、目が覚めた。どこかはわからないが、ベッドのようなものに仰向けに横たわっているようだった。寝起きは悪い方じゃないが、まだ頭がボーっとしている。

何があっただんだ？ そうだ、神様に会ったんだ。

神様？ 神様でいいんだよな。会ったんだ。

それで・・・どうしたんだ？ 唯のことを祈ったんだ。

唯っ

そこまで考えて一瞬に覚醒した。慌てて俺の周りに視線を向ける。よくわからないが、どこかの部屋にいるようだ。病院の白を基調とした病室とは違う、木目調の部屋・・・というか、木造りの部屋。おそらくこちら木造りであろうベッドに俺はいた。

唯は、俺の隣にいた。

スヤスヤと眠っているように思える。病室にいたときのように熱にうなされているわけでもなく、穏やかな表情だった。愛らしい娘の寝顔をずっと見つめていたいと一瞬考えたが、やっぱり確かめたい。唯に声をかけるため、身体を唯の方へ向けようとすると、唯の小さな手が俺の服を握っていることに気付いた。離されないように、唯がいつも俺にする癖のようなものだ。その手を潰さないように、ゆっくりと唯の方へ身体を向ける。

「唯？」

そつと声をかける。

すると、唯の目がゆつくりと眩しさに耐えるかように開いていく。

「・・・ぱぱ？」

寝ぼけているような声だが、病室にいたところに比べてはつきりとした声で俺を呼ぶ。

「唯、パパだ。わかるか？」

「うん。おはよう、ぱぱ」

唯だ。元気だったころのいつもの唯だ。

「ああ、おはよう」

そう返すと、唯は俺に抱きついてくる。

おはよう、と言ったものの、時間の感覚がないので朝なのかどうなのか、わからないが。

「ぱぱ、ここ、どこ？」

ひとしきり抱きついたあと、周りをキョロキョロと見回し、俺に聞いてくる。

「どこなんだろうなー」

俺にもよくわからないので、そのまま答えた。

この部屋には、俺と唯が寝ているベッド1つと、クローゼットらしきものが1つ。大きな扉が付いているのは、この部屋の出入り口だろう。木窓が一つ付いているが、すぐ外に樹が生い茂っており、風景は見えない。俺の記憶にある場所じゃない。ここが異世界なのか？

「お姉さんがいった、いせかい？」

唯につられてきよろきよろと見回していると、唯がそんなことを言った。

お姉さん？

「唯、お姉さんって誰だ？」

「知らないひと。声だけきこえた」

俺に選択を示した神様だろうか？俺も姿は見えていない。声が頭に響いてきただけだ。

「そのお姉さんが異世界だって言ったのか？」

「うん。いせかいつてところにいくつて、いつてた。ぱばもいっしょ」

「そうか・・・」

よくわからないが、唯のところにもあの神様は現れたらしい。とりあえず、唯の頭を撫でておく。

「うん」

嬉しそうに目を細めて返事をする。唯は頭を撫でられるの好きだからなあ。

頭を撫でていた手を、おでこのところにもってくる。

「ぱばので、あったかい」

うん、熱はない。唯は本当に元気になったんだ。

「あったかいかな？」

「うん、いつもひんやりしてた」

そう言つて、自分の手をおでこの上の俺の手に重ねる。唯の手は少しひんやりしているが、生きている温かさだ。

「唯、もう少し寝ていいぞ」

何せ、病み上がりだからな。いくら元気になったからといって、すぐに今までどおりにさせるわけにはいかない。

「ゆい、ねむくないよ？」

声もしっかりしているから本当なのだろう。それでも無理はさせた

くない。

「病気が治ったばかりだからな。眠って、しっかり治しちゃおうな」  
不思議そうな顔で俺を見てくるが、納得したのか、うん、と頷いて  
目を閉じる。

聞き訳の良い子だな。

ここは神様のいう異世界なのだろう。壁紙のない木の壁、アルミサ  
ッシのない木窓、天井に目を向けても照明器具もない。夜になっ  
たら明かりはどうするのだろうか。異世界というより時代遡行だな。  
この世界で俺にできること、この世界をよく見てみないといけな  
い。

「ばば」

目を瞑ったままの唯が声をかけてくる。眠くないのだろう。俺に言  
われたからか目は瞑っているが。

「どうした、唯」

「あのね、どうぶつえん行きたい」

普通の唯は我がまを滅多に言わない。普通の幼稚園児のような駄  
々をこねるといふこともない。それなので、唯が行きたいという  
ところには連れて行ってあげたいのだが……。あるのか？動物園。

「うーん、動物園なあ」

「いせかいに、ないの？どうぶつえん」

悲しそうな顔をして聞いてくる。

「動物園さがしてみような」

ひとつ目標ができた。この世界で動物園があるか確認してみよう。

「うん！」

よかった、笑顔になった。そろそろ、俺までここで寝ているわけに  
もいかないか。

そう思い、身体を起こそうとしたその時、部屋の外から足音が聞こえてきた。

コン、コン

「目を覚まされましたか？」  
扉の外から女性の声が聞こえた。

### 3 異世界へ（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

唯、元気になりました。

これから元気な唯を表現できるのは、書く方も嬉しいです。

これまで誤字脱字等ございましたらお知らせください。投稿前に確認してはいるのですが、自信がないのでお願い致します。

#### 4 フレリア（前書き）

尊と唯以外の人物が登場です。はじめはフレリア。

## 4 フレイア

「目を覚まされましたか？」

扉の外から聞こえてくる声に反応できず、扉をまじまじと見てしまっていた。

「ぱぱ？」

唯の声にハツとして、とりあえず声をかけてみる。

「あー、はい」

と言っても何を答えればわからず、よくわからない返事になってしまったが。

カチャリ

入ってきたのは、シルバーブロンドの髪が腰のあたりまである、美人さんだった。年頃は、俺より少し上、30代半ばと思われる。開いた扉の音に唯が驚いたのか、俺にしがみついていた。

その美女のプラチナゴールドの瞳が俺を捉える。

「お加減はいかがですか？」

薄桃色の唇から発せられる声は、とても澄んでいて、神々しく思えた。

驚きに目を見開いていた俺に、再度、声を掛けられた。

「あー、はい。大丈夫です」

本当に大丈夫なのか、よくわからないが。

とにかく俺自身に体調の不良は感じられない。唯の病み上がりではあるが、元気そうに見える。



「よかったです」

ブラチナゴールドの瞳が安堵の色を示す。

ニコニコとこちらを見ているが、この美女は誰なんだ？ 普通に考えれば、この部屋というか家の持ち主なのだろうが。

「ぱぱ？」

先ほどから俺にしがみついている唯が、その瞳を美女に向けたまま俺を呼ぶ。

「こんにちは」

唯に向けた言葉なのだろう、美女が唯に視線を向け、いつそう柔らかく声をかける。ベッドに横になっている唯の視線に合わせるためか、少し屈んだ。その拍子に、見事なシルバーブロンドがサラリと広がる。

「ぱぱ」

どうしたらいいのかと唯がこちらを向く。

そんな唯を安心させるように頭を撫でる。父子家庭であり祖母に育てられた唯は、幼稚園に通うようになってからも結構人見知りすると聞いたことがある。

頭を撫でてもらって嬉しいのか、唯は目を細めて美女の方を向く。

「こんにちは」

唯が美女に声をかけた。美女の瞳がさらに柔らかくなる。

「はい、こんにちは。お名前は何ていうのかな？」

「えっと、すずの、ゆい」

唯がはずかしそうに答えた。“鈴野”という姓はほとんど聞こえなかったが、名前ははっきり言えた。

美女は少し考えたあと、

「ユイちゃん、でいいのかな？ 私はフレシアです。よろしくね」

「うん、えへへ」

唯が嬉しそうに笑って、俺の服をギュッと握ってくる。

「あつと、俺は鈴野尊です。それと、ここは・・・？」

美女改めフレリアさんがこちらに視線を向けたので、流れに乗って自己紹介した。俺だけ名のらないのも変だったので丁度よかった。

フレリアさんは、またも少し考えたあと、

「はい。タケルさんですね。ここは私の家です。詳しい話は、むこうの部屋に夫がいますので、そちらで」

フレリアさんは既婚者でした。まあ、俺は今でも妻だった幸一筋だから関係ないが。

「変わった服装ですが、どちらの方ですか？」  
唐突にフレリアさんが聞いてくる。

さて、何と答えるか。

シルバーブロンドの髪にプラチナゴールドの瞳。そして、おそらく異世界。にもかかわらず、日本語が通じている。

そう、会話は日本語だった。俺は外国語が話せないし、幼稚園児の唯に話せるわけがない。

日本という国から来ました、と言って大丈夫だろうか。唯のことで異世界に行くとしたことに後悔はまったくくないが、言葉の問題や生活の問題をまったく考えていなかった。

まあ、俺にあの段階でそこまで考えられるわけがないのだが。

難しく考えても仕方がない。

「あの、日本という国から来ました」

もう、そのまま答えることにする。フレリアさんの今の対応をみても、おかしい態度をとられることはないだろう、と判断したからだった。

「ニホン、ですか」

フレイアさんが初めて難しい顔をした。おそらく、聞いたことがないということなのだろう。

フレイアさんはそのまま言葉を発せずに考えている。

急に黙ってしまったフレイアさんと俺を唯は交互に視線を動かしていた。そんな唯に気付いた俺とフレイアさんは、唯に笑顔を向ける。

「わかりました。詳しくは夫とともに伺いしますね」

そう言つて、いったん保留にすることを提案された。俺も異存はないため頷く。

「おい、フレイア？」

離れたところから、フレイアさんを呼ぶ声が聞こえた。おそらく、先ほどから会話に出てくるフレイアさんの夫なのだろう。

「はい、今行きます」

呼びかけにそう答えて、俺たちの様子を伺う。

「では、お話をお聞きたいので、来ていただけますか？ おなかも空いているでしょうし」

その声と同時に唯のお腹から、クウという音がする。

唯は少し顔を赤らめたかと思うと、俺の胸に顔をうずめる。

うん、はずしかつたのだろう。

フツ、と笑ったフレイアさんは、

「ユイちゃん、おいしいご飯を用意するね」

そういつて、部屋を出て行こうとするので、俺は唯を抱きあげて、ベッドから降りることにした。

#### 4 フレイア（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

フレイアさん登場！・・・と、その夫が声だけ登場です。  
どんどん、登場人物が増えていく予定？たぶん。

## 5 ディスセス（前書き）

あけましておめでとうございます。

「異世界の料理人」ともども、本年もよろしくお願い申し上げます。

## 5 ディスケス

フレシアさんの後に続き、今いた部屋を出て廊下を少し歩くと、先ほどより大きな部屋に出た。部屋には、横に2名ずつ掛けられる大きなテーブルが1つ。椅子も4脚。大きな木窓もあるが、ここも外に植物が生い茂り、風景を見ることはできない。壁は作り付けの棚となっており、いろいろ置いてあるのがわかる。

現代風にいえばリビングダイニングといったところだろうか。目算だが、8畳くらいはあると思う。

その部屋に男が一人、椅子に座ってこちらを眺めていた。

見た目は、俺よりひと回り上くらいの年齢。赤の短髪。瞳の色は深紅かブラウンか。ここからではハッキリと色がわからないが、初めてみる瞳の色だ。

彼がフレシアさんの夫なのだろう。フレシアさんの隣に並んでも遜色ない男前だった。

「おつ、やっと起きてきやがったか」

その男がフランクに声をかけてきた。

「はい、声をかけたときには気がついていましたよ」

そう、フレシアさんが答える。

「鈴野尊です。ご迷惑をおかけしてます」

そう言って、軽く頭を下げる。社交辞令ではあるが、当たり障りのない言葉をかける。日本人の性だな、などどうでもいいを考えてしまう。

ちなみに唯は、抱きあげられた俺にしがみつき、顔をうずめたまま

である。

「なにが迷惑なのかよくわからんが、まあ、いい。お嬢ちゃんは大丈夫か？」

「はい、ありがとう・・・ございます」

もう一度、頭を軽く下げて、唯に、あいさつ、と軽く促すと、唯が頭を上げて男の方を向く。

「ゆい、です」

言葉とともに頭が少し動いたのは、お辞儀をしたかったのだろう。

「おう、ディスクスだ。よろしくな」

そう言つてニカツと笑う。笑うと思つたより若いな、とも思ふ。もしかすると俺より少し上くらいの歳なのかもしれない。

唯は、少しびっくりした表情を浮かべたあと、パツと笑顔になった。

「まあ、立ち話もなんですから、座ってください」

夫の横で様子をうかがっていたフレイアさんがテーブルの椅子を勧めてくるので、唯を抱いたまま椅子に座ろうとするが、唯がモゾモゾ動いたので床に降ろしてやると、自分で椅子に座ろうとした。

唯、その椅子は大人用で、しかも少し高くなっているから、自分で座るのは難しいぞ

5歳になる唯の身長は、100cmくらい。椅子の座面の高さは、50cmくらいだろうか。腰の高さくらいある椅子に座るのは初めてだろう。俺たちが暮らしていた部屋は、畳にちゃぶ台みたいなものだったし、幼稚園でもそんな高さの椅子はなかったはずだ。椅子が倒れないように押さえているのだが、唯は、うんしょ、うんしょと擬音が聞こえるように頑張っている。

「かわいいな」

「はい」

そんな声が聞こえてきた。視線を向けると2人が微笑ましく見ている。

たしかに唯は可愛いが、誰にもやらんぞ

そんなことを考えているうちに、唯は登頂に成功したらしい。チョコンと椅子に座って、横に立っていた俺を見上げる。

「ぱぱ、できた！」

満面の笑みで見上げてくる唯は、天使だった……コホン、可愛い娘だった。

「よくできたな」

ご褒美に頭を少し強くなでてやると、その強さに目をつぶってしまったが、笑顔のままなので大丈夫だろう。

そんな微笑ましい雰囲気のもと、俺も席に着く。

「改めて自己紹介をするが、俺はディスクスニクス。こっちは、フレイアニクス。俺の妻だ」

そう言つて、ディスクスさんは自分とフレイアさんの自己紹介をした。そのまま視線を俺に向ける。

「俺は鈴野尊。尊が名前で、鈴野は姓…家名です。それで、こっちが唯。俺の娘、です」

姓、と言ったときに怪訝そうな顔をされたので、家名と言い直した。「スズイノ…家名なのか」

発音が微妙に違う気がするが、そこは流した。そういえば、フレイアさんも俺たちが名のつたとき、名前の方を呼んだな。すずの、という言葉が聞き取れなかったのかとも思ったが、家名と思わなかったからなのかもしれない。この世界は、名前ニ姓なのだろう。『ニクス』というのが彼らの家名か。



「まあ、尊、唯と呼んでくれれば構わない」

つい、普段の話し方になってしまったが、2人とも表情が変わった感じがなかったので、それで通させてもらう。丁寧に話すのは慣れていないので、おかしなことを言いそうで、さっきから怖かったのだ。

「わかった。俺もデイスケスとか、ディーとか、父様とか、パパとか適当に呼んでくれ」

「わたしもフレイアと呼んでください」

……一部、変な言葉が混じっていたが、突っ込んでいいのだろうか。ディーが愛称なのだろうことは推測できるが。突っ込んででも仕方がないので流そうとしたところ、デイスケスさんがつまらなそうな顔をした。このおっさんは、突っ込んでほしかったのか…。

「さて、まず何で2人がここにいるのかを説明しないとな」

和やかな雰囲気から一転して、少し硬い雰囲気になったためだろうか、唯は口を挟まず大人しく話を聞いている。

デイスケスさんが、いきなり本題に入ってきた。

どのようにこの世界に来たのかはわからないが、何らかの経緯があって俺たちは保護されたのだろう。2人が悪いタイプの人間には見えないので、その辺りの事情を教えてほしいと思う。

「ああ、なぜ俺たちがここに？」

俺の問いに、私が説明しよう、とフレイアさんに代わったのだ。

「神の啓示を受けたのです」

神妙な表情で、フレイアさんは、そう言った

## 5 ディスセス（後書き）

ディスセス登場の回です。

唯が、うんしょ、うんしょと椅子によじ登る回でもあります（笑）

## 6 啓示（前書き）

第6話です。

この世界では、異世界の存在が当然あるものとして認識されています。

## 6 啓示

「神の啓示を受けたのです」

神妙な顔で告げたフレイアさん。

「神の啓示、ですか」

「ええ、夫とともに森に行け、と」

フレイアさんが神妙な面持ちのままそう言う。啓示そのものは、単純なものようだ。

「ああ、俺は毎日街はずれの森に行って、狩りをしているからな。」

「そうなんです。普段は、ディーが一人で森に行ってくれるのですが、神の啓示があつたものですから私も同行しました」

「まあ、神の啓示なんて、そうそうあるもんじゃないが……」

その後、2人が森に行ってみると、森の少し開けたところに俺と唯が倒れていたらしい。ディスクスさんが俺を背負い、フレイアさんが唯を抱いて、そのまま森を抜け、この家に戻ってきたとか。

「それにしても、神の啓示というのは？」

少なくとも、俺にはそんなご大層な出来事が起こった経験はない。あえて言うなら、病室での神様？との邂逅くらいか。しかし、あれは“神の啓示”というものとは違う気がする。

「ああ、フレイアはもともと神官だからな。神の啓示っていうのは、ある程度の神官が、直接、女神から言葉を賜ることだ。……でいいんだよね？」

「はい」

フレイアさんがニッコリ返事をする。フレイアさんは神官だったのか。

「それで、お前たちはどこから来たんだ？」

その質問に先ほどフレリアさんに言っただけを答える。

「日本、というところからです」

「ニホン…、聞いたことないな」

デイスケスさんは怪訝そうな顔をして何かを考えるようなしぐさをする。

「どうしてあの森にいたのかは、わかりますか？」

デイスケスさんが考え込んでしまったようで、今度はフレリアさんが聞いてくる。

ここで、唯のこと、異世界に来ることになった経緯を話すかどうか迷ったが、この2人にならと、俺は話した。

「渡世人とせびとか・・・」

デイスケスさんが、つぶやくようにそう言う。デイスケスさんもフレリアさんも俺の話に少し驚いていたようだが、俺が想像していたような驚きは示さなかった。

もともと、神の啓示があり、行ってみると人が倒れている。何らかの事情があることは考えなくてもわかることだ。それも神様が関わっているほどの。

「とせびと？」

俺の疑問にデイスケスさんが答えてくれた。

「ああ、渡世人。女神ディオネの意思により、この世界に来た人間をそう呼んでる」

この世界『ディオネシア』には、女神の意思により、この世界に渡

つてきた人間が少ないながら何度かあつたらしい。

女神ディオネ。

この世界では、創造神といわれており、フレイアさんはその教団の神官をしていた、とのこと。

また、この世界に渡世人が来る時には、教団の神官に何らかの啓示があることもわかつている。2人も俺たちを保護したとき、真っ先にその可能性を考えたらしい。

少なからず存在した渡世人。彼らは、この世界で様々な文化や技術を提供した。例えば、言葉であつたり、魔法であつたり。農法というものもあつたらしい。

そう、魔法。

この世界には魔法がある。

…といっても、魔法を使えるのは一握りの人間だけで、普及しているとは言い難いらしいが。その代わり、その魔法士が創る魔法具というのが一般には出回っており、生活の一部として出回っている。魔法そのものとは違い、例えば、火を付ける、明かりを灯す、など簡単なことしかできないらしい。

もともと、この世界にも魔法というものはあつたらしいのだが、魔法具という概念がなかったらしく、一般庶民には、王侯貴族などが使う未知の技に近いものであつた。

しかし、1人の渡世人が魔法具という概念を持ち込み、庶民に普及させたらしい。

「さて、これからどうするか、だな」

デイスケスさんとフレイアさんが一通りこの世界の説明をしてくれたあと、デイスケスさんが今後のことを尋ねてくる。

渡世人といっても、国や教団は基本的に無干渉。過去に渡世人を国や教団で保護しようとして神の怒りをかった、ということがあったのが原因らしい。詳しい話が庶民には伝わっていないため、本当の話かどうか知らないが、今も無干渉を貫いていることから何らかの出来事はあったのではないかといわれている。

「その前にお昼にしませんか？ 時間もだいぶ経っていますし」

フレイアさんが休憩しようと提案してくる。そういえば、唯はお腹が空いていたんだった。

ふと、唯の顔を伺うと、少し眠たそうにしながらも俺たちの話を聞いている。唯には難しい話だったろうし、退屈だったんだろう。それでも大人しくしている唯は、本当にいい子だと思う。

「唯、大丈夫か？」

「うん」

「まあ、そうだな。フレイア頼む」

フレイアさんが椅子から立ち上がって、隣の部屋に行く。おそらくそこが台所なのだろう。

隣の部屋からカタカタ音がしたと思ったら、数分の後に深めの木皿などを持って戻ってきた。そして、各人のまえに木のスプーンを置く。木皿は重ねたままテーブルの端に置いた。

もう一度、隣の部屋に戻って、持ってきたのは鉄製の寸胴鍋らしきものだった。湯気が経っていることから、煮込みか何かだろうか。

「もうちょっと待つてくださいね」

そう唯に声をかけ、最後にコップパンらしきものを持ってくる。唯は待ち切れなさそうに、視線を寸胴鍋とパンを交互に見ている。

「お待たせしました。今日はご馳走ですよ」  
フレリアさんはニッコリ笑って寸胴鍋のふたを開け、中身を木皿に取り分けて各人に配る。

ほぼ透明のスープの中には、ジャガイモらしきもの、ニンジンと思わしきもの、茄子と思われるもの、あとは丸い玉ねぎのようなもの。それらが入っていた。

……原形のまま。

「ぱぱ……」

とても困ったような顔をして俺を見上げる唯。

祖母が亡くなってから、唯のご飯はすべて俺が作っていた。飯にも料理人だったので、唯のご飯だって手間をかけて作っていたのだ。

わかる。わかるぞ、唯。野菜そのままを放り込んだ鍋なんて食べたことないもんな。



## 6 啓示（後書き）

『渡世人』は、この物語上の造語です。

本来、『渡世人』はトセイニンと読み、博徒（現代のヤクザ）を指します。

この物語では、『渡世人』をトセビトと読ませ、（異）世界を渡った人という意味を持たせています。

以上、補足でした。

## 7 料理

念のため補足しておくが、ジャガイモらしきものにしても、ニンジンらしきものにしても、はたまた茄子らしきものにしても、これまで俺が使ってきた食材よりもひと回りからふた回り小さいもので、原型のまま投入したとしても無理があるとは言いつてもいいサイズだが、ここまで手をかけない料理もなかなかお目にかかれない。

フレリアさんは料理が得意ではないのか？ この世界の基準がよくわからん。

デイスケスさんとフレリアさんは戸惑う俺と唯に気付かず、普通に食べている。食べ物なのだから大丈夫だとは思うのだが、恐る恐るスープを飲んでみると、少し塩味の効いた味だった。うつすらとしたピリ辛味を感じたのは、唐辛子ではなくコショウと思われる。コンソメスープならば良いと思ったのだが、これも悪くはない。

そんな俺を見た唯も恐る恐る食べ始める。唯の口には少し大きいジャガイモを木のスプーンで掬い、はむはむ、と食べ始めた。

ジャガイモは、ほくほくだった。ニンジンも柔らかくなっている。茄子も同様だ。シャキシャキしているかと思つた玉ねぎも過熱されていて、甘みがあつた。食べてみる限り、料理に問題はないような気がする。

「ぱぱ、おいしい」

唯が俺を見ながらそう言つた。

確かに味に問題はない。ただ、唯はよほど失敗しない限り美味しいと言つので当てにはできないが。

「ユイちゃん、ありがとう」

味を褒められたからか、フレリアさんが嬉しそうにお礼を言う。

「そうだろう、そうだろう。フレリアは料理が上手いからな」

デイスケスさんも嬉しそうにしている。

フレリアさんは料理が上手らしい。

料理人をしていた俺を基準に考えるのは筋違いとして、唯の祖母の料理にしたってこれくらいは作っていたような気がする。そして、祖母は料理が苦手だったはず。

この世界の料理の基準を確認するか

もしかしたら、この世界でも料理人としてやっていけるかもしれない。

他に俺にできることなんて、たかが知れているんだから、わかりやすく料理人としての腕を揮うことが一番近道のような気がする。

そんなことを考えながら食事は進んでいく。唯もこぼさずに上手に食べていた。小さな口で、はぐはぐ食べている姿は小動物のようだ。微笑ましく見ていると、フレリアさんも同じだったようで、唯の食べる姿を見ていた。

「フフツ、かわいいですね」

俺と目が合ったフレリアさんが、ふとこぼす。

「はい」

食べ終えた俺やデイスケスさん、フレリアさんは、唯の食べる様を見ている。

そんな視線に気づかない唯は、ゆっくりと料理を平らげていく。

「唯、もういいのか？」

あらかた食べ終わった唯にそう声をかけると、

「うん、ゆい、おなかいっぱい。ごちそうさまでした」

その言葉を聞いたフレイアさんが立ち上がり、お茶を用意してくれる。お茶は緑茶ではなく、紅茶のようだ。紅茶の種類は詳しくわからないが。

「ぱぱ」

お茶を飲みながらまったりしていると、唯が俺を見上げてくる。

「唯、どした？」

「あのね、ぱぱのごはんがたべたい」

その言葉を理解したとき、とっさに言葉を返せなかった。

唯は長い間病院で入院していた。当然、その間、病院で用意されるご飯を食べていたため、俺の手料理を食べていなかった。

そういえば、入院中も『ぱぱのごはんがたべたい』と言っていたことがある。その時は、元気になったら唯が好きなものを作ってやると言ったが、約束は守らないとな。唯の大好物はハンバーグ。この世界でも作れるかな。

「そうだな。唯の好きなハンバーグ作ってやるぞ。約束だからな」

「わーい」

唯がバンザイをして喜びを表す。

「よかったですね」

フレイアさんも嬉しそうにしている。

「おい、おい、作れるのか？」

デイスケスさんが不安そうに聞いてくる。俺が料理人だったことは、まだ話してなかったな。

唯が病気で入院していたことはさっき話したので、俺が料理人とし

て仕事をしていたことを話すと、デイスケスさんも納得してくれた。俺の作る料理が楽しみらしい。

まあ、ただのハンバーグだから期待されても困るのだが。

「ところで、はんばーぐ？とは、何ですか？」

この世界では、名前が違うのか、ハンバーグそのものが無いのかわからないが、ハンバーグを説明するのは難しかったので、肉料理であること、具体的には作ったものを見てくれ、ということでごまかした。ひき肉料理では説明にもならんだろうし。

「わかりました。それでは材料を用意しなければなりませんね」

フレイアさんがどんな材料が必要なのか尋ねてくるので、

「そうですね。玉ねぎはある、パンもあるので、卵とひき肉があればいいんですが」

ハンバーグに必要な材料を挙げてみる。

「ひき肉ですか？」

「もも肉でもいいですよ」

フレイアさんがわからないといった表情なので、これは俺が見るしかないだろう。

「それでは、夕飯をタケルさんに用意してもらうことにして、お買い物に行きましょう」

フレイアさんが両手を合わせて、そう提案する。

「お願いします」

街の様子や食材などの食事情をよく確認しなければな。

一休み後、この世界の街を見ることになった。

## 8 カデッサ

この世界ディオネシアには3つの大陸がある。北大陸、東大陸、西大陸。

その北大陸に3つの国家、北部にディオネ教団の聖都を要するアカルナイ皇国、西部に軍事国家ディミトリオス、東部に商人の街ハルキスが発展した商業国家ハルキス。

デイスケスさんやフレイアさんが住むこの街は、そのアカルナイ皇国南部の街カデッサという。

人口は4千人くらいの地方都市で、商業国家ハルキスと近いため、ハルキスからの輸入品が数多く入ってくることも知られている。

……ということを、商業区に向かう間、デイスケスさんから教えてもらった。

ちなみに、フレイアさんは家でお留守番。

デイスケスさんいわく、

「なんで、フレイアが小僧と出歩かなきゃなんねえんだ。俺が行くに決まってるだろう」

…だそうだ。

外は寒かったので、俺と唯の分の外套を借りた。

唯の分は、身体には少し大きかったため、余った部分を折り畳んでいる。俺の分は、デイスケスさんのものらしい。少し大きい気がするほどではない。

カデッサの街並みは、木造りの建物や石造りの建物が多く、コンク

リートの類は見られない。感覚的には、木造りの建物で言えば江戸時代、石造りの建物で言えば中世ヨーロッパといったところだろうか。

唯は、そんな街並みが珍しいのだろう、キョロキョロしながら歩いている。

時折、ぱぱ、と言って、珍しいものを指差し、これ何？ と聞いてくるが、俺にはわからないので、代わりにデイスケスさんが答えてくれる、ということを繰り返している。

デイスケスさんの話によると、この街力デッサは、街の北側一帯に領主や貴族たちが住む区域があり、中央を貫く大通りの両側に商店が立ち並んでいるらしい。大通りから西側に行くにつれて、職人たちの工場があり、東側に商業区が広がり、その外側に一般居住区となっているとのことだ。

デイスケスさんの家は、その大通りから少し入った商業区と一般居住区の境あたりにあるらしいが、食料品を扱う店はちよつと離れているとのこと。

「なあ、どれくらいで着くんだ？ その食料品を扱っている店って」俺はそれほど苦にならないが、病み上がりの唯を考えると、あまり外を歩かせたくないの聞いてみたのだが、

「俺についてこい。キリキリ歩け」

そんな回答が返ってきた。このおっさんから。

俺たちの少し前をトコトコと歩いていた唯が立ち止り、俺を見上げてくるので、頭を撫でて手を繋ぐ。唯はしっかりと手を繋ぎ、俺の横を歩き始めた。唯の歩く速さにあわせて歩いているのだが、足取りもしっかりとしたもので、病み上がりということを感ぜさせない

ので安心した。

「あー、ユイ、楽しいか？」

突然、前を歩いていたらディスクスさんが唯の隣に来る。

「…うん、ぱぱとあるけて、たのしい」

少し考えたあと、そう言った。

病院から出ることのできなかった期間が長かったため、外を歩くと  
いうのが楽しいのだろう。

様子を見ながらになるが、前のように元気に走りまわる唯を見られ  
るのも、そう遠くないかもしれない。

「それにしても、結構、人が出歩いているんだな」

都内の週末、とは言わないが、地方都市のショッピングセンターく  
らいには人通りはある。

「まあ、最近は魔物が大人しいからな」

「魔物？」

魔物なんて言葉を聞くとは思わなかった。

「ああ、お前の世界に魔物はいなかったのか？」

魔物。

魔物とは、負の情念が動植物に影響を与え、異形化したものを言う  
らしい。もちろん、そんな魔物は地球には存在しなかったので、見  
たこともないことを伝える。

「ほお、ずいぶん平和だったんだな」

「いや、その分、人間同士が争っていたぞ」

地球での人の歴史は、人間同士の争いの歴史、みたいなことを聞い  
たことがある。

「まあ、その辺りは同じなんだな。人間と亜人が争うのは、なかな



が無いからな」

「あじん？」

また変な言葉が出てきた。

「ああ、獣人やエルフ、ドワーフなんかだな。この北大陸じゃ、獣人はともかく、エルフやドワーフは滅多に見かけることはないがな」

亜人。

獣人やエルフ、ドワーフなどを総称して亜人というらしい。彼らは、ほぼ東大陸に住んでおり、北大陸に来ることはあまりないという。

「この世界には、そういうのもいるのか」

「いなかったのか？」

もし、いたら騒ぎになっているだろう。ネタとしては見たことがあるが。あれは、被り物か。

「ああ、見たこともないな」

そんなことをディスクスさんと2人話していると、唯が急に立ち止まった。

「ぱぱ」

唯が空いている手で屋台のようなところを指差す。

そこは公園のようになっており、いくつかの屋台のようなものが出ていた。

「ん？ どうした」

「お祭り？」

屋台のようなものがあつたので、唯はそう思ったのだろう。

昔、近所の神社でお祭りが行われたとき、唯を連れていったことがある。

普段は何もない参道なのだが、その日だけは、道の両側に屋台が立ち並び、夜にもかかわらず煌々と光が漏れていたことを思い出す。

あのすぐ後だったな、唯が突然高熱を出して、入院することになったのは。

「んあ？ お祭りじゃねえな。いつもここはこんな感じだ」

「そうなんだ……」

唯が、ちよつと残念そうにしている。

「唯、また来ような」

ああいった場所は俺には退屈な場所だが、唯にとっては楽しめる場所だろう。今は、ディスクスさんに食料品の店を案内してもらっているところだから、後で唯と来ようと思う。

「うん、ぱぱ、ありがと」

唯は嬉しそうに笑って答えた。

「ああ、もうすぐ、その店だ」

公園のすぐ横に、少し大きな木造りの建物があり、店先には街の八百屋のように野菜が並んでいた。

店の前で野菜を並べている女性の後ろ姿がここから見える。

「おい、テティスー」

突然、ディスクスさんが大声を出す。

その声に反応したのは、店の前にいた女性だった。

「あつ、お父さん」

そう言つて振り向いた女性を見て、俺は息を詰まらせ固まった。

幸

幸。俺の妻であり、唯の母親である、幸に瓜二つの女性がこちらを見て手を振っている。

隣りで、まま、とつぶやく唯の声が聞こえた。

## 8 カデッサ（後書き）

サブタイトルに番号を振り、本文冒頭のサブタイトル表記を削りました。

ここまでの分も修正済みです。

1 / 1 2 一部、修正しました。

## 9 ティイス

「ままつ」

気づいたら、隣にいたはずの唯がティイスと呼ばれた女性の腰のあたりに抱きついていた。

ママツ、ママツ、と必死に呼びかけながら。

唯が生まれてすぐ、幸は息を引き取った。それなので、幸の顔を写真でしか見たことが無い。これまで会うことが叶わなかったママ幸に似た女性に、会いたい、という気持ちが爆発したのかもしれない。

そばまで行くと、ティイスの容姿がよくわかるようになる。赤みがかったブラウンの髪に、薄いブラウンの瞳。近寄ると、黒目黒髪の幸との違いがはっきりする。遠目にはそっくりだったが、瞳の色、髪の色を除けば、瓜二つといったところだろうか。

「こんにちは、です」

そんな唯に動揺することもなく、ティイスと呼ばれた女性は、唯と視線を合わせるためにしゃがんだ。

「……ママ？ ……とちがう……」

少し落ち着いたのだろう、唯がティイスと目を合わせた。

「ティイスです、よろしくです」

ティイスと見つめあっていたが、しばらく経って唯が目を離し、俯く。

「…うん」

悲しそうな唯に声をかけると、ぱぱ、といって俺に抱きついてくる。泣いてはいないが、今にも泣きそうな感じだった。

唯は、ママに会いたい、と俺にこぼしたことは数えるほどしかない。それは、俺が幸　ママとの“楽しい”エピソードを話した時で、いなくて寂しい、といった様子ではなかった。ママに会いたいのか？　と聞いても、ぱぱがいるからいい、と答える唯だったが、本当は会いたかったのかもしれない。

「あーっと、俺の娘だ」

唐突にデイスケスさんがテティスを差し言う。

「こんにちは、です。テティスといいます」

立ち上がり、俺の顔を見て挨拶してくる。

「あー、はい、尊です。こっちは唯です」

そう答えながら驚く。

娘？

テティスは、デイスケスさんの娘らしい。歳は、15、6歳くらいか。このおっさんに、こんな大きな娘がいるとは思わなかった。

まじまじとテティスを見てみると、テティスははずかしそうに、顔を赤らめて俯く。

その様子を見たデイスケスさんが、

「何ジロジロ見てんだ、小僧。テティスに手を出すんじゃないぞ」  
いきなり怒られた。

手を出すって…。娘のいる前で変なこと言うな。

「お父さん」

困ったような表情でテティスがデイスケスさんを抑える。

「デイスケスさんに、こんな大きな娘がいたんだな」

「あん？ 何だ小僧、俺に娘がいちゃおかしいのかよ」  
いや、おかしくはないんだが…。

「デイスケスさんって、いったい幾つなんだ？」

「おう、俺か？ もう40超えてるぞ」

また、驚いた。見た目に似合わず、結構な歳だったんだな。

「お父さんは、若く見られます」

笑顔のテティスが口を開いた。

「フレリアもそうだが、テティスもやっぱり低く見られるよな」

この家族は、実際の年齢より低く見られるらしい。

すると、テティスはいくつ位なんだろう…。

「わたしもよく成人していないと思われちゃいます」

笑顔だったテティスが困ったような顔を見せる。

「ああ、今でもテティスは16歳以下に見られるらしいな」

こちらのデイスケスさんも困り顔で言っている。

この世界では、成人＝16歳なのか。

「テティスさんは、16歳なのか」

今の話の流れから想像して言ってみる。外見から想像したものでもあるが。

「20歳ですっ」

……顔を真っ赤にして怒られました。

デイスケスさんといい、テティスといい、俺の創造した年齢プラス5歳くらいのような。とすると、フレリアさんはいくつなんだろうか？

「それじゃ、フレリアさんで、いくつなんですか？」

「おっと、それは聞いちゃいけない質問だな」

デイスケスさんの言葉にテティスが、うんうん、頷いている。

なんじゃそりゃ？ 女性の年齢は聞くな、ということか？  
何となく教えてもらえない雰囲気だった。

周囲の微妙な沈黙のなか、落ち着いたのか、抱きついていていた唯が顔を上げた。

「ばば」

「ん？ どうした？」

俺を見上げていた唯が、テティスの方を向く。

「んーと、ゆい、5さい！」

そういつて、手を上げて掌を広げる。

今の話を聞いていて、各々の年齢を教えあっていると思ったのだろう。

「はい。ユイちゃんは、5歳ですね」

テティスは、しゃがんで唯に視線を合わせると、ニッコリ笑顔で答えた。

「うんっ！」

元気のいい返事とともに、テティスに抱きつく。テティスもしつかりと抱きしめてくれた。

「えへへっ」

唯の嬉しそうな、くぐもった声が聞こえた。

よかった

瞳の色と髪の色を除けば、幸　ママに瓜二つのテティスを見て  
も大丈夫らしい。テティスを最初に見たときの唯の反応を考えると、  
少し心配したが。

「そういえば、お父さん。今日はどうしたんですか？」  
そうして、当初の目的をティイスに伝えることになった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6498z/>

---

異世界の料理人

2012年1月14日19時32分発行